



御用聞きのおすすめ

大分県・大分県立日田高等学校 2年 深見 友哉

私の父親は酒屋の四代目である。私の祖父は父親が小学1年の冬、事故で34歳の若さで亡くなっている。だから、父は今の私と同じ高校生の頃から学校や部活の合間に曾祖父や祖母の手伝いで酒屋の雑用などをしていたらしい。そんな父が学校を卒業し本格的に跡取りとして店に入ったのは、平成4年のことだった。その頃といえば、今まで日田市内になかった酒のディスカウントショップができ、お客さんは少しでも安く商品を手に入れようと行列を作ったらしい。我が家は昔ながらの小売店。到底、大手ディスカウントショップに対抗出来るはずがない。このままでは、お得意先も徐々に離れていってしまうのではないかという危機感が父親にはあった。

そこで父親は小さな酒屋ならではの特色を出そうと今後の商売のあり方を考えたらしい。

まず初めに多くの酒蔵を巡り、本当に美味^{おい}しい酒を探し出し、提供していくこと。自らが満足のいく味でなければ、お客様に薦めてはいけないと。結婚したての両親は、若さだけを武器に開拓をしていったと笑っていた。

それともう一つ、小売店だからこそ出来る売り方^{こだわ}に拘るという点だった。これは、顔の見える商売というべきか。家族だけの店なので、じっくりと時間をかけて、お客さんと向き合うということ。多数のお客さんの来店はもちろん嬉しいことだ。しかし、一人一人、時間をかけ接客していくことは、長く店を続けていく両親にとっては、当たり前^{うれ}の選択なのだ。実際に父親の店には店内にお客様専用の座るスペースが設けられている。ここでお茶を飲み、暑い日には涼んでもらおうというのだ。

そのスペースのおかげなのか、祖母や母親は、とても楽しそうにお客様と他愛もない話をしている。そんな感じでちょっとした拘りの店に落ち着こうとしていた頃、去年他界した曾祖父が昔の酒屋の話をしてくれたらしい。





曾祖父の若い頃は、お客様の家を一軒一軒訪ね、注文をとる「御用聞き」をしていた。そこで色々な世間話をし、お互いの近況を知る。曾祖父は多くのお客様の家庭の事情も知っていた。それは曾祖父だけの特別なことではなく、多くの人が近所のことを知っていたらしい。誰かの家庭で大変なことが起これば、すぐに周りに知れ渡り、みんなで加勢をする。いわば近所は血のつながりのない親戚のよう。

曾祖父は、ただ単に商品を買ってもらうためだけでなく、お客さんとの付き合いを楽しみ、それが商売へと繋がっていたようだ。誰々さんが持ってくる〇〇。そこには商品よりも店主の顔の方が、より意味を成していたようだ。

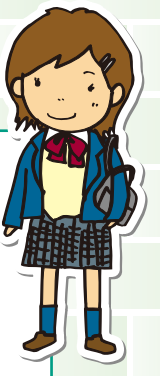
現代はインターネットの普及などで、誰とも会わずに話さずに必要なものを買うことが出来る。これはこれで便利だし私も大いに利用している一人かもしれない。

しかし、日田のような小さな町では、あまりにも殺風景な暮らしにならないか。加えて一人暮らしの高齢者ともなると、寂しい日常になってしまう。

現在、日田市の約7万の人口の約3割が高齢者である。そんな町では「御用聞き」こそ、もってこいのコミュニケーションになるのではないだろうかと思はれた。

資料によれば、アメリカをはじめとする欧米では「高齢者に対するコミュニケーション」に関する研究が70年代から盛んになり、高齢者に対する子供に話しかけるような話し方を、その特徴から「第二のベビートーク」などと呼び、高齢者の尊厳を損なうものであるとして、問題視するようになった。また90年代に入ってから、話し手本人は、良かれと思って、高齢者に対して不必要にゆっくり話す、大きい声で話すなどのいたわるような言語行動をしている場合もあることや、話し方だけでなく、手、腕などを撫でるといような非言語行動も含めて、「保護するようなコミュニケーション」と位置づけられ、批判的な観点からの研究がますます盛んになってきているらしい。それは日本の現状や問題点にも通じるところが少なくないそうだ。その研究成果を吟味し、高齢者の人権を尊重するため、また世代間コミュニケーションをより円滑におこなうことによって、各世代が互いに学び合い共存していかなければならない、とある。何もそんなに難しく捉えなくても、いいのではないか。





私の家庭は四世代家族。私は小さい頃から、曾祖父や曾祖母、祖母から様々な生活の知恵を教わり、共に過ごしてきた。

しかし、核家族化が進み、高齢者だけでなく、世代を超えた交わりがない人もいるだろう。

だから、私は「御用聞き」の精神を薦めたいのである。もちろん商売の御用聞きという意味合いでなく、隣近所との顔を合わせた、ちょっと足を踏み入れた付き合いという意味だ。地域が大きな家族のようなスタイルで生活出来れば、世代を超えたコミュニケーションとなり、豊かな心が育ち、子供も大人も元気が生まれるのではないだろうか。すると、そこには生活のゆとりが生まれ、商売もしやすくなる。

携帯電話の普及で、同じ家に居ても携帯電話で用事を済ます、という話を聞いたことがある。それが二、三軒も離れると尚更だろう。昔は、そういう物がなかったから、わざわざ訪ねていかなければならなかったのかもしれない。しかし今の私たちが感じる不便さこそ、人と人を繋ぐ時間で、便利と感じることがコミュニケーションの妨げになっているのかもしれない。一度、便利さを味わうとなかなか戻れないと思うこともある。しかしこの町で生活を送る人たちが飾らないコミュニケーションを通し、豊かな心を育み、たくましい生活の知恵と共に、力強く生きていくためには、もう一度昔のやり方を実践していくべきである。

まずは、この町で商売を続ける両親に「御用聞き」の精神で、ますます地域に密着した店づくりをして欲しい。便利さや時間に追われることなく商売を楽しんだ曾祖父のように。

<参考文献>

- ・宇佐美まゆみ「高齢者とのコミュニケーション」東京都健康長寿医療センター研究所 第57回老年学公開講座、1998年11月27日
URL http://www.tmig.or.jp/J_TMIG/kouenkai/koza/57koza_3.html

